

# 福島いきいき新聞

## わらじ組世界進出



わらじ組の方々が指導した編みぞうりの体験作業

わらじ組は、会津美里町の仮設住宅の中にある。2011年6月、仮設住宅に入ったときは、悩みを相談したりするような知り合いではなかった。2011年12月、役場の提案を受け、NPOなどの協力を設立した。当初は20人で始まったが、現在は8人で作業している。1日8〜9足を丁寧に心を込めて編み上げていく。販売した欧州でも好評を得た。

60足を2週間で編み上げると、販売を支援する人に送っている。「わらじ組という名前には、自分達では決めたわけではないが、いつの間にかそう呼ばれるようになった」と、代表の高木キヨ子さんは笑う。

## 最年長は91歳、高級ブランドとコラボ

わらじ組8人の最年長、戸田幸雄さんは、大正13年生まれ。今年で91歳を迎える。年齢を聞いて驚いたときは、とても驚いた。多い時には一日2足作る。わらじ組に入った理由をたずねると「手を動

かすと、ボケなくていいからねえ。」戸田さんが作った布草履などが昨年、東京のデパートで販売された。イタリアの高級ブランド「マルニ」の関係者の目に留まった。「マルニ」

は、震災被災者を支援する目的で、「わらじ組」とコラボすることになった。パリなどでも販売され、仮設から始まった「わらじ組」の活動が世界に広まった瞬間であった。(芳賀咲良・江川穂)



代表の木村達彦さん、新藤さん、戸田幸雄さん、佐竹さん、右から、高木さん、後列の納高さん

## 「命の見回り」町民支え

### 大熊町社協「つながり！おおくま」

大熊町社会福祉協議会(社協)が運営する生活ボランティアセンター「つながり！おおくま」は、避難されている大熊町民の方々のサポートを中心に活動している。東京電力第一原発の事故後、大熊町民は一時的に田村市に避難。さまざまな困難に遭遇した。その後、会津若松市役所追手町第二市庁に町役場を移し、本格的に支援活動を開始した。

津若松市役所追手町第二市庁に町役場を移し、本格的に支援活動を開始した。

しかし、最初の課題が浮上する。県内外に避難されている住民の安否確認だ。「誰がどこにいないのが分からないので不安でした」と話すのは、事務局長の根本豊稔さん(59)。職員の確保も難しい中、根本さんは毎日22時まで見回りに奔走した。「つながり！おおくま」



前左から2人目の根本事務局長ら大熊町社会福祉協議会の皆さん

高木さんらの勧めで、私たちが布草履の編み上げに挑戦した。布草履を足の指や、木の作業台を使い、編む作業だ。編み目が不揃いにならないように、丁寧に

編んでみたが、初めてのことなのでどうしても編み目が不揃いになってしまいう。しかし、わらじ組の人たちは、全ての編み目を均等に編んでいくのだ。私たちがとても驚かされた。職人技だと思った。

高木さんはわらじ組を始めると、木村さん、新藤さん、佐竹さん、高木さん、後列の納高さん、右から、高木さん、後列の納高さん

避難中の苦勞を感じさせず、みんな明るくいいきと作業をしていた。普通はくじけそうな境遇の中、みなさんのたくましさを感じさせられた。最後に、これからの活動について聞いてみた。高木さんは、「これからも、前向きに、出会いを大切に頑張りたいが、いつか橋業に戻りたい。」と語った。(吉川怜寧)



私たちが編集しました

- (中山) 小南(小)
- (山松) 妻下(小)
- (若松) 坂下(小)
- (吾妻) 坂下(小)
- (坂下) 国見(小)
- (金平) 良稔(小)
- (華平) 良稔(小)
- (木康) 咲良(小)
- (佐藤) 芳江(小)
- (江川) 穂(小)
- (佐藤) 芳江(小)

は、生活支援相談員19名を含む46名が県内各地で活動を支えている。仮設住宅の見回りや高齢者の心のケアが主だが、住民から相談を受けることも多々あるという。「戻れるまで30年というわが国、その間の見通しが持てません。大熊町に帰りたいという住民の皆さんに、しっかりとした答えを出せないのが残念」と

根本さん。だがその一方、繋がりを大切にする活動もいくつか行っている。「サロン」と呼ばれる町民の憩いの場を設置し、定期的に軽スポーツなどのイベントを行っている。また、広報「なごみ」を発行し、社協の働きを広く仮設住宅などに発信している。読者の方から感想の電話が来ると、とてもやりがいを感じるそうだ。

これからについて聞くと、根本さんは「まだ震災の影響で不安を抱えたり、孤立したりしている方々がいらっしゃいます。これからも、避難されている方々の心のケアや仮設住宅の見守り、分ける範囲での情報提供などを継続していきたいと考えています」と力強く語った。(佐々木華・橋本康平・佐藤健彦)



取材に応じる根本事務局長